

丸ペンのスケッチから (3)

広瀬事務所(建築技術研究所)時代のスケッチ。

PART-6

研究室 卒業生の作品

ここでは、広瀬研究室の卒業生の現在に至るまでの「作品」をまとめてある。ここでいう「作品」とは、かならずしも建築作品ばかりではなく、インテリアだけのデザイン、イメージ・コンペ的なものや御輿、仏像、アートのインスタレーションまで幅広い範囲のものである。また、自身の建築作品として発表しにくい場合も考慮して、共同設計者、あるいは担当者の一員として参加したものも対象としている。

これらの「作品」は、卒業生に呼びかけて応募してもらったもので、当初はもっと幅広く解釈して、現場監理だけの場合や論文発表、写真なども含めるつもりでいたが、予想以上に建築作品の応募が多く、紙面の都合でなにかしらデザインされたものに絞ることにした。また、整理の都合で、広瀬研究室の特質と思われるいくつかのジャンルを設定し、区分しているが、設計者自身が選択したジャンル分けではないので、おことわりしておく。(编者)

1 システマティックな アイデア展開

広瀬研究室共通の課題のひとつとなっていたのが、設計に対するシステマティックなアプローチである。それは部品化へのアプローチであったり、設計手法のシステム化であったり、モジュラー・コーディネーション(MC)による寸法体系の応用であったりと、さまざまある。ここではそうした傾向の見える作品を紹介している。

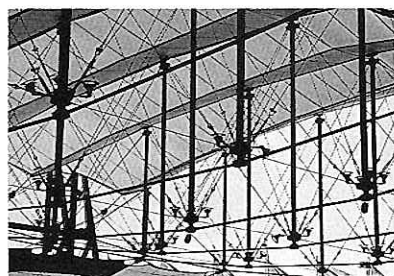
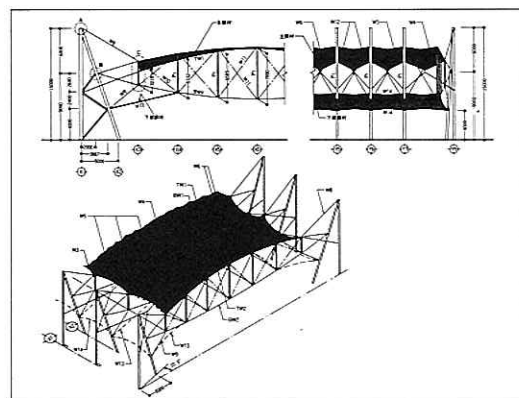
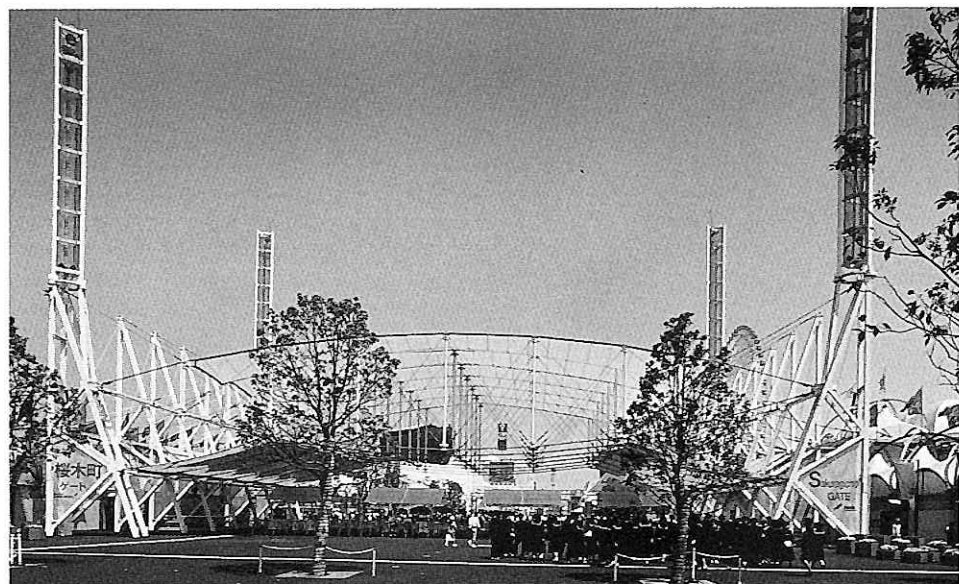
(编者)

GATE SHELTER AT YOKOHAMA EXPO "YES '89"

NORIYUKI ASAKURA, KENJI TAMURA

ゲートシェルター

竣工：1989年 神奈川県横浜市
 朝倉則幸 1968年卒業、田村賢治 1984年卒業
 GK設計



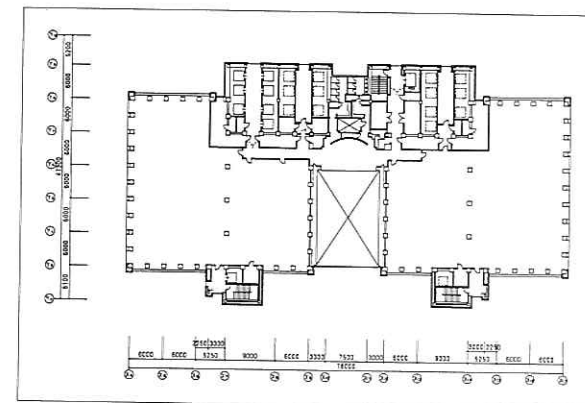
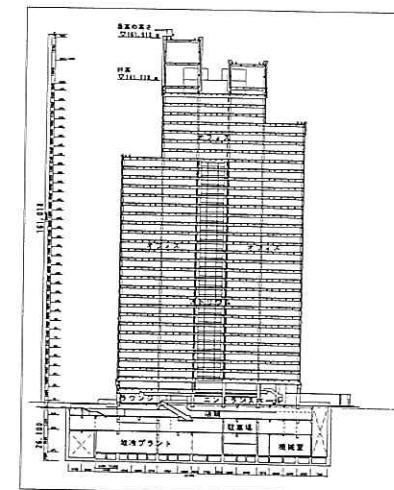
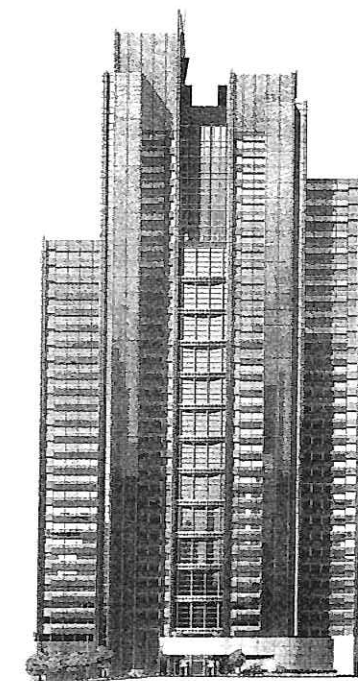
博覧会とは、特定の会期にひじょうに多数の人が参集する非日常的なインスタントシティである。この“町”を生きたものにするには、重厚、固定的に對象をとらえる「建築」の概念ではなく、軽快、自由にその機能を表現できる「仮設」のデザインが有効である。そこに目的の自由な表現、組み立て、解体、移動、転用、再生といった仮設の技術が発揮され、高性能、高品質な部品や装置を生み出しながら、新しい建築の概念を創造することが目的である。4つのゲートシェルターには改札装置、照明、色彩、サインを総合的に組み込み、共通の形態システムでゲート機能をわかりやすく展開し、周辺の個性ある施設と合わせて特徴を出すようにした。架構の形式は、サスペンション膜構造や骨組膜構造と異なり、上下の弦材および変形防止の斜材をスチールワイヤーとしており、垂直の圧縮材の役割をもたせた鋼管のポールによって連続梁を構成する。この構造の特徴は、膜材を構造体から切り離れたところにある。すなわち、テント膜材を上弦材としてポール柱頭で固定することで、日本で初めての約50mのロングスパンをもつ軽量のプレストレスダブル張弦構造をつくり上げた。膜材を構造から解放すれば、膜材のもつ軽量で可搬性に富む特性を存分に生かせる。軽快なライトコンストラクションは、浮遊感のある柔らかなシェルターを可能にしたのである。

SHINJYUKU MINAMI RC BUILDING

YOYOGI, SHIBUYA-KU, TOKYO
 MICHIO KURAKAZU

新宿南RCビル (仮称)

竣工：1995年予定 東京都渋谷区代々木2丁目
 倉斗道夫
 1967年卒業
 (株)日本設計
 共同設計者：(株)日本設計



新宿駅南口に近い旧国鉄中央病院跡地に建つ賃貸オフィスビル（一部店舗）計画である。設計手法は総合設計制度（大規模公開空地型）を適用している。敷地が不整形であったり、隣接地（ホテル、病院）との関係で、プランニング上種々の制約を受けたりしたが、最終的には中央にアトリウムをもつ偏心コアタイプとした。

オフィスビルのモジュールは、一般的に3200mm、3600mm、5400mmがよく使われるが、これらは執務空間の使われ方に合わせているのではなく、むしろスプリンクラー配置など、法的、技術的な合理性によるものが大きい。また近年、オフィスレイアウトも多様化し、一元的なモジュール体系での対応は難しくなっている。この計画では単位モジュールを750mmと小さくすることで、照明器具、空調吹き出し口などの互換性を高め、間仕切り位置のフレキシビリティを高めた。執務空間の照明器具配置、アトリウムとの関係などはCADによるシミュレーションを通してデザイン決定を行った。この計画の他のテーマは、南面採光のアトリウムである。アトリウムはコンピュータによる上層階への延焼シミュレーションを行い、基準法38条の大臣認定を受け、堅穴区画の免除を行っている。

●作品概要

主な用途：事務所、店舗
 敷地面積：11,500 m²
 建築面積：3,659 m²
 延床面積：102,694 m²
 規模：地上34階、地下3階
 高さ：161 m
 主な構造：S造

PROJECT MA '87・88

SHINGO MITO, YOSHIKI SHAKUTA, JUNICHI KAMON,
YASUMASA KINUGAWA, HIDESHI NAKATA

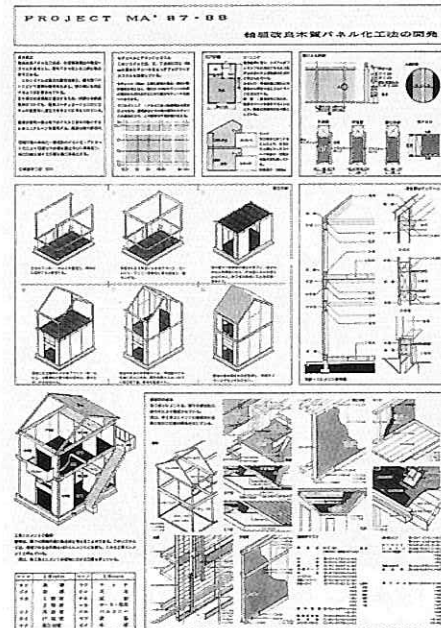
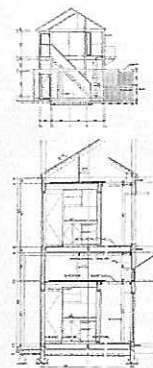
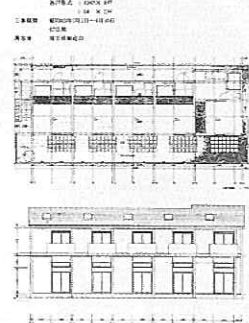


図 12-12 断面図

建築家 日新製鋼(株) 建築設計部
設計者 三登真吾 尺田可規 加門潤一 中田英史
1:1000 1/2000 1/5000
1:1000 1/2000 1/5000
1:1000 1/2000 1/5000



2000年10月 2000年11月 2000年12月

PROJECT MA'87・88

三登真吾 1968年卒業、尺田可規 1977年卒業、
加門潤一 1986年卒業、絹川靖昌 1986年卒業、
中田英史 1986年卒業、堀切直方 1986年卒業

毎年2千棟以上のアパートを在来工法の手づくりで建設していた会社に、以下の提案をしてみた。

- ①企画、設計業務のシステム化
- ②資材流通、入手の簡素化
- ③現場アッセンブリーの簡素化と工期短縮を目的とした生産システムのプレハブ化

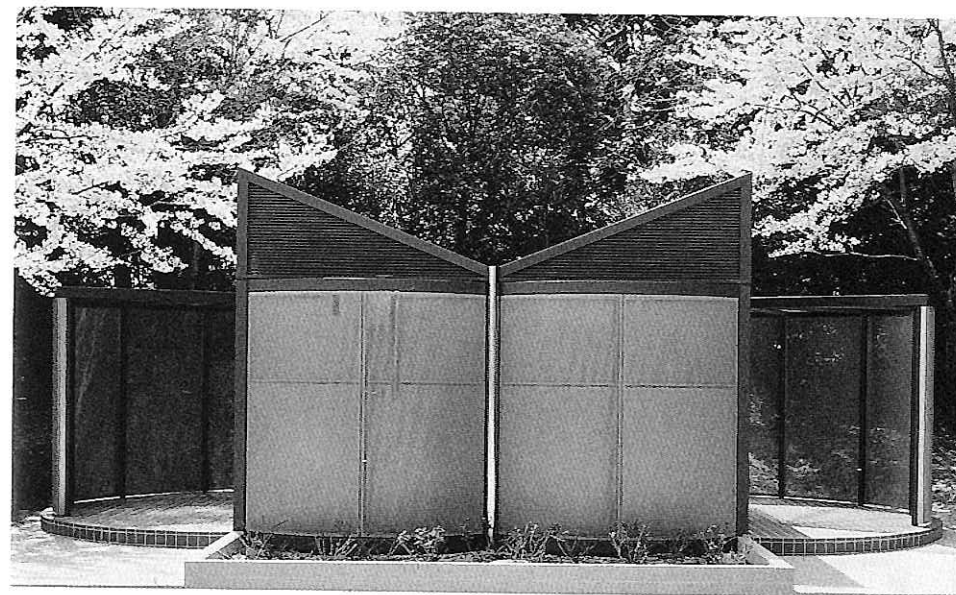
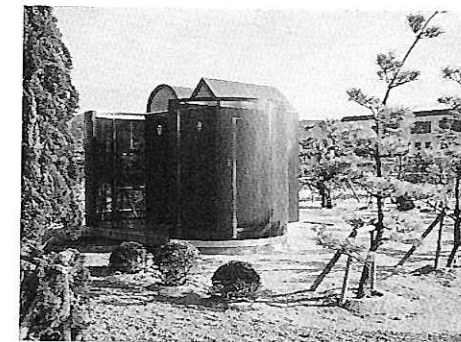
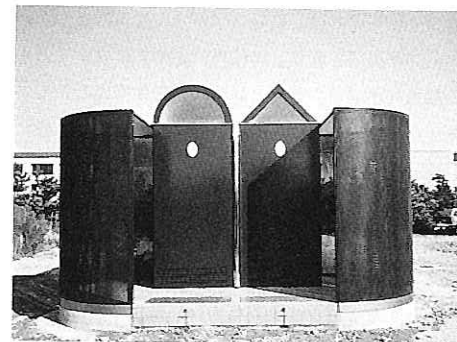
まずその会社の社員の頭の切り換え教育から始めなければならなかった。基本システムのプログラム、そしてプロトタイプデータの収集にいたるまで、広瀬先生をはじめ、研究室の諸兄にはたいへんお世話になった。平面標準化やCADによるシステム化に関しては、1969年卒業の岩下氏の協力を得た。実に4年半以上の年月を要した総合開発であったが、結果が出るのはまだ多少の時間が必要だろう。

PUBLIC TOILET, PROTOTYPE

TOKUYAMA-SHI, YAMAGUCHI

PUBLIC TOILET AT EIGENZAN

SHIN-NANYO-SHI, YAMAGUCHI
JYOJI NIWA



日新製鋼パブリックトイレ・プロトタイプ①

竣工：1988年 山口県徳山市

永源山公園パブリックトイレ②

竣工：1991年 山口県新南陽市

このトイレは日新製鋼(株)のパブリックトイレとして開発したものである。1ユニットは1m×2m(プロトタイプ)、2.2m×4.4m(永源山公園)とし、それぞれを連結してバリエーションをもたせた。構成はスチールフレームにステンレスパネル(内外壁とも)からなり、基礎工事後、床フレーム、壁フレーム、屋根フレームを設置し、順次壁パネル、屋根パネルを装着した。将来的には、プレファブ化率を高めるために、各フレームにパネルを装着した状態で現場に持ち込み、ジョイントするという方法を計画している。デザイン的には、箱構成による単調さを和らげるように屋根に表情をもたせ、またバンチングの曲面パネルを入り口と壁面に取りつけた。

●作品概要①

主な用途：便所
建築面積：8.2㎡
高さ：2.8m
主な構造：S造

●作品概要②

主な用途：便所
建築面積：29.5㎡
高さ：3.3m
主な構造：S造

CAPSULE LODGE

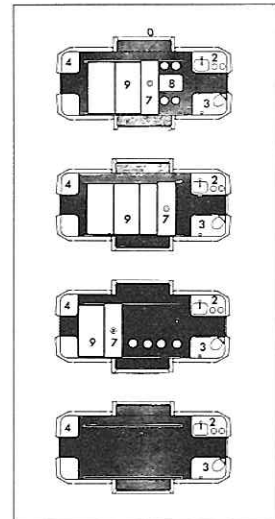
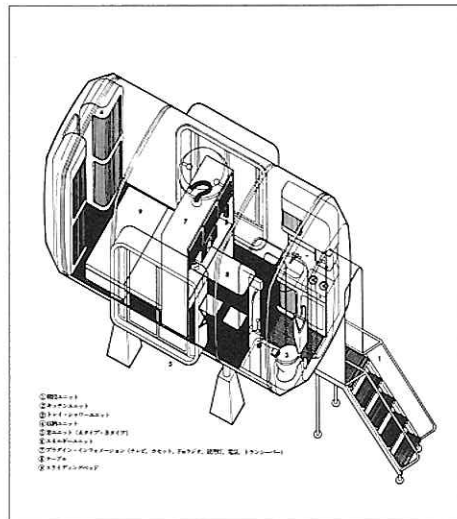
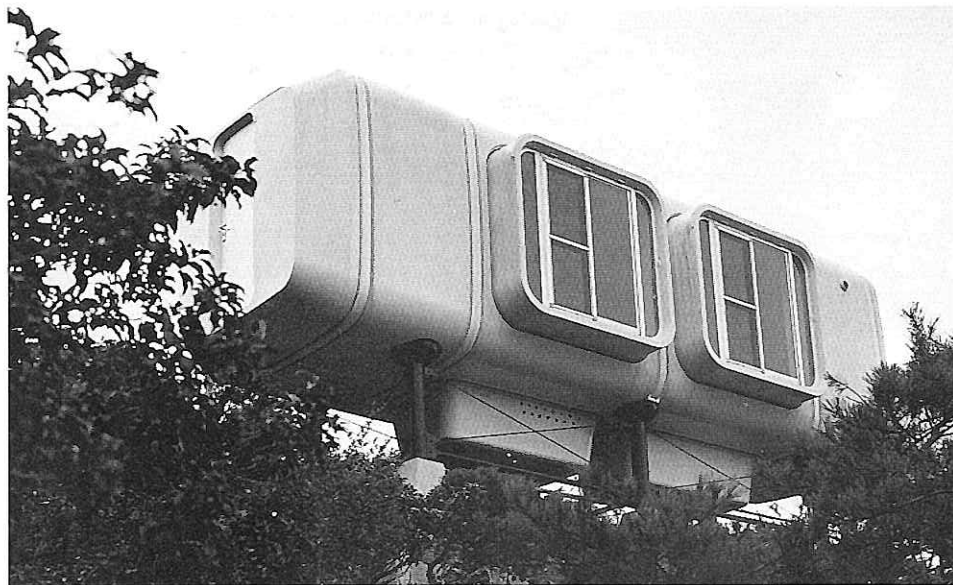
NORIYUKI ASAKURA

カプセル・ロッジ

朝倉則幸

1968年卒業

GK設計



移動家具による居住空間の変化

カプセル空間では、狭いスペース内で多様な生活パターンが展開される。居住単位とするには、対応する融通性が要求されると同時に、居住空間としての秩序が確保されなければならない。しかし、一般には狭いスペースで使用される道具は多様な生活パターンに対応する融通性をもたせると、かえって混乱を招き、カプセル空間を倉庫化してしまう。そこで関連家具が、ある種の軌道によって秩序づけられながら、すなわちシステム化され、自在に融通できる移動のルールが必要となる。ここでは床に取りつけたレールの上を、軌道にコントロールされながらプラグ・インフォメーションが移動する。これはスライディングベッドとの組み合わせで、自在化するカプセル空間の核となっている。

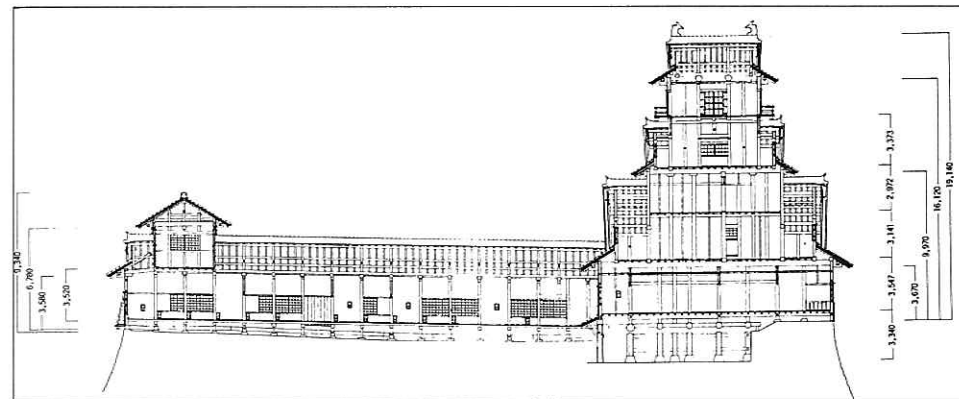
カプセル化という志向は、デザインにおける方法論に、リミットな状況を想定することによって、よりコンパクトな道具空間の発想を助ける。その効果は、破壊されつつある自然環境に対して、自在性のある離陸した環境をもって、新しい組み方を発見していくところにある。さらに、宇宙船カプセルにみられるように、高度な生体-環境系、人間-道具系の検討のひな型的なものが、ここでクローズアップされる点でも、日常生活を対象とする一般住宅のデザイン論の停滞を打ち破る刺激となりうる。

2 歴史を背景とするデザイン

ここでは、広瀬研究室のもうひとつの特性ともいえる歴史的な建築・造形文化を背景とする作品をまとめている。広瀬の担当した建築史の講義用テキストは『伝統のディテール』であったが、建築家が教える建築史は、デザイン活動のバックグラウンドとして役立つことも多いようで、文化財の保存修復、あるいは古建築の復原といった特異な分野のデザイナーに限らず、通常の建築設計にも生かされることは多いようである。(編者)

PRESERVATION & RESTORATION OF "UTO-YAGURA", KUMAMOTO-JYO CASTLE

KUMAMOTO-SHI, KUMAMOTO
KAZUYUKI YANO



桁行断面図

重要文化財熊本城宇土櫓保存修理

竣工：1989年 熊本県熊本市

矢野和之

1969年卒業

文化財保存計画協会

共同設計者：細川道大、木下寿之、丹羽譲治(展示サイン)

重要文化財熊本城宇土櫓は、櫓というには巨大で、従来三之天守などと呼ばれてきた建物である。三重五階、地下一階の規模をもち、五階には廻縁と高欄が付いている。

熊本城は日本三名城の一つで、加藤清正の築造によるが、明治10年の西南の役で、建物の大半は焼失してしまった。現在、残る宇土櫓など12棟が国の重要文化財となっている。宇土櫓は昭和2年に軍の手で解体修理が行われていたが、その後ふたたび白蟻の被害が大きくなり、昭和60年度より平成元年まで足掛け5年にわたり半解体修理が行われた。この工事にともない、種々の調査を行い、熊本城と宇土櫓の成立について新たな知見をえた。

清正築造の熊本城は、従来一つのものと考えられていたが、文献調査、石垣調査他の結果から3時期に分かれ、第一次(天正18年)、第二次(慶長3-5年)、第三次(慶長5-15年)が設定可能であり、宇土櫓は第二次熊本城の天守であると考えられる。修理前は、この櫓は非公開であったが、修理後は内部に古瓦や構造模型などを展示して一般公開している。

PHOTO: HIROAKI MISAWA

REBUILDING DESIGN FOR THE SECOND FLOOR HALL OF "SUKIYA-MARU", KUMAMOTO-JYO CASTLE

KUMAMOTO-SHI, KUMAMOTO
KAZUYUKI YANO



熊本城数寄屋丸二階御広間復原

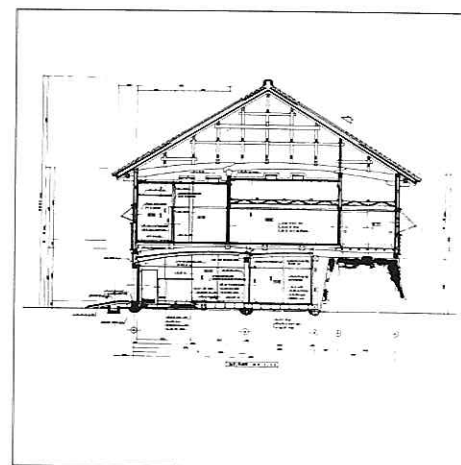
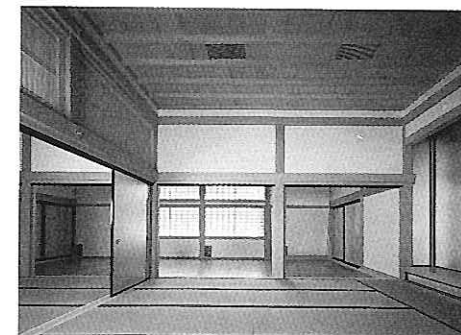
竣工：1989年 熊本県熊本市本丸

矢野和之

1969年卒業

文化財保存計画協会

共同設計者：木下寿之



熊本城数寄屋丸二階御広間は、明治初期には解体されてしまった建物である。しかし、天守東にあった熊本城管理事務所の撤去・移転にともない、新たな管理事務所として使うために復原したものである。幸い、寛政10年および明和6年の絵図が残っており、寛政10年の絵図は正確であると判断できたため、柱位置や柱間装置の状況もほぼわかった。また、発掘調査の結果、半数以上の礎石が原位置を保っていることがわかり、その礎石を使用するとともに、他は新たに補足して、見え隠れに年号を刻印した真鍮ボルトを埋め込んだ。一部の礎石には柱のカゲが見え、一階の柱の径もわかった。

復原検討の結果、外観は櫓であるが、数寄屋丸二階御広間は接待用の空間で、主室は2間半四方、武者走を能舞台とすることも出来る特異なものであることがわかった。材木は九州山地から樹齢400年の梅を手に入れ、鋳金物は城内の出土遺物の中にあつた釘隠し、襖引手を参考として復原した。復原目標時期を慶長5年ころと想定し、熊本城には近江大工も参加していることや上級家臣に近江出身が多いことも考え合わせ、園城寺勸学院客殿の室内比例関係やディテールを参考にした。この内部を一部改装し、熊本城管理事務所として使用するとともに、一部は見学用に市民に開放している。

PHOTO: HIROAKI MISAWA

●作品概要

主な用途：復原展示および管理事務所

延床面積：815.65㎡

規模：地上2階

高さ：19.1m

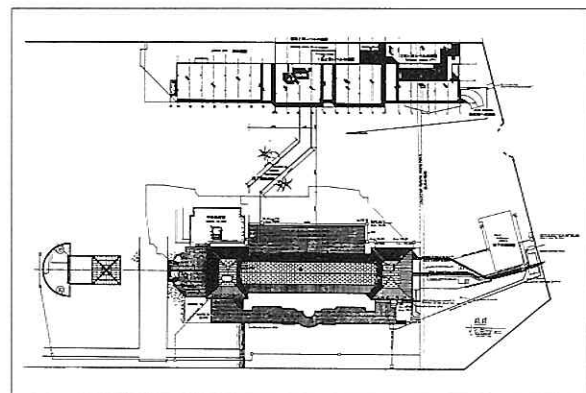
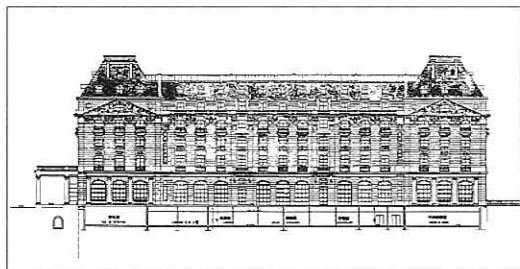
主な構造：木造

THE RESTORATION AND EXTENSION OF TRIANON PALACE

VERSAILLES, FRANCE
NAOTO OGANE



VERSAILLES - Le Trianon Palace 1910



トリアノンパレスホテルの改修、増築

竣工：1992年 フランス、ヴェルサイユ市

大金直人

1973年卒業

アルクデザインパートナーズ

共同設計者：ジャック・メシャリ（新館） 旧館原設計：ルネ・セルジャン

1910年にルネ・セルジャンの設計によって建てられたこのホテルは、さまざまな歴史を刻んでいる。1919年には列強の首脳がここの一室に集まり、ベルサイユ条約に調印した。今まで迎えたゲストにはエリザベス女王をはじめ、ブルースト、デートリッヒ、ロックフェラーなど各界のそうそうたる面々が名を連ねている。老朽化にともない、改修見直しをすることになった。新館を増築して客室や駐車スペースの不足を補って、大会議にも対応できるようにした。旧館は空調設備を新設し、客室の水まわりを含む諸機能の充実、地階の厨房施設の近代化をはかった。旧館は階高が高いので、空調設備は天井を新設して天井内配管によるファンコイル方式で対応した。最も困難だったのは地階の厨房改修で、階高不足のため床を60cmも下げなければならず、組積造の壁を6等分し、順次解体しては新設していった。旧館のインテリアは、ルイ15世様式のオリジナルデザインに戻すことにし、主要な部分には昔ながらの方法で金箔が施された。プラスター塗りの柱や台座にも、大理石模様のペインティングを行った。こうした手作業は若い職人たちが活躍してくれたが、このような職種がまだ残っていることに驚かされた。

●作品概要

主な用途：ホテル

敷地面積：約30,000㎡

建築面積：約3,000㎡

延床面積：約23,000㎡

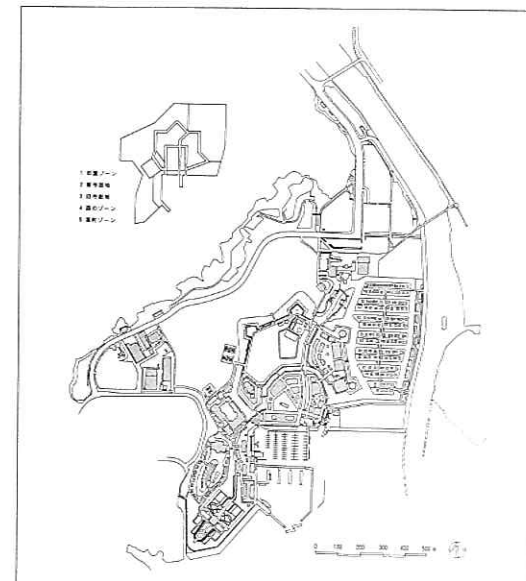
規模：新館—地上4階、地下3階

旧館—地上6階、地下1階

高さ：16.5m

HUIS TEN BOSCH

SASEBO-SHI, NAGASAKI
MITSUO ITO



長崎オランダ村 ハウステンボス

竣工：1992年 長崎県佐世保市ハウステンボス町

伊藤光生

1983年卒業

(株)日本設計

共同設計者：(株)日本設計、F.C.ホフマン&V.ガローニ&Qデザイナーズほか

1985年に広瀬研究室修士課程終了後、日本設計に入社。初年度からハウステンボスが竣工するまで、7年間長崎オランダ村とかかわってきた。私にとって、現実に建築を考える入り口となったのがこの仕事である。長崎オランダ村、およびハウステンボスは、できる限り忠実にオランダの建物を再現しようというコンセプトに基づいて展開された。プロジェクトごとにオランダの古建築の専門家との打ち合わせが相次いだ。私自身もオランダの記念建物保存局、都市計画セクションへ10か月間留学をし、スタディを重ねた。調査写真だけで数万枚にもものぼったほどである。その結果、幸か不幸か、強烈なオランダのイメージをつくり出すことができた。しかし、それゆえに、建築的にはどう判断するかを難しくしているようである。この計画にとって、オランダとは表層の問題であると同時に、思想的背景でもある。歴史を重ねた建築物と日常的につき合っていく作法、自然環境をみずから問題として主体的にとらえる作法、居心地のいい場所にみずから置く努力……長い時間軸の中で生活をつくり上げてきた彼らの考え方は、ハウステンボスという施設にとどまらない懐の深さをもって私の中に存在している。私にとっては、広瀬研究室時代に次いで強く影響を受けた日々であった。

●作品概要

主な用途：ホテル、店舗、飲食店、アミューズメント施設、博物館、住宅ほか

敷地面積：152ha

建築面積：100,000㎡

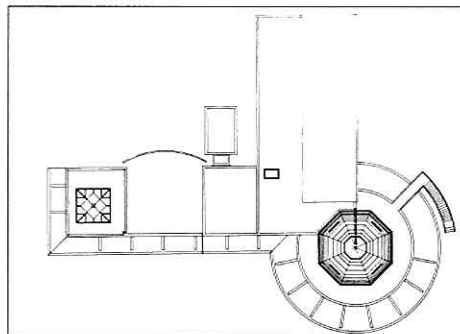
延床面積：200,000㎡

規模：地上1~7階

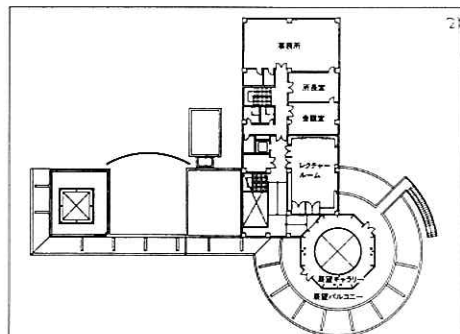
高さ：105.3m (展望塔)

UMAMI PARK VISITOR CENTER

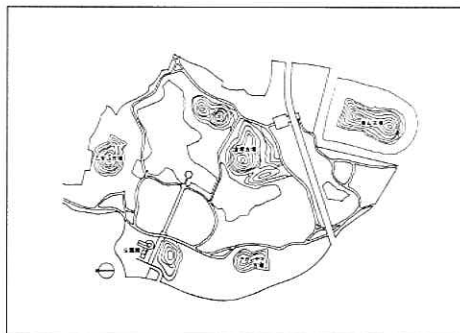
KITAKUTSURAGI-GUN, NARA
YUTAKA HONDA



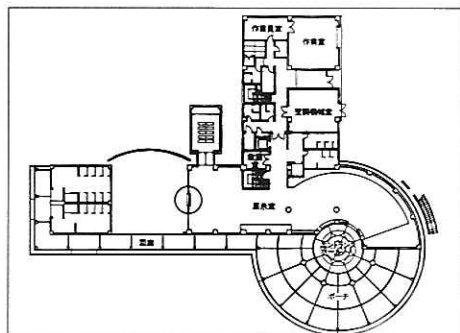
屋根状図



2階平面図



配置図



1階平面図

馬見丘陵公園館

竣工：1991年 奈良県北葛城郡

本多豊

1982年卒業

建築研究所アーキヴィジョン

共同設計者：戸尾任宏（建築研究所アーキヴィジョン）

馬見丘陵公園は奈良県が建設した広域公園で、園内にナガラヤマ古墳や乙女山古墳など、国の史跡に指定された古墳がいくつも分布している。これらはすでに木に覆われ、多くの植物や野鳥の生息の場となっている。

入り口近くにある公園館は、来訪者に地域の自然や古代に関する情報を提供し、公園での新しい体験を予見させる役割と、公園管理事務所、公衆便所の機能を備えている。公園館の外観は、公園へのインフォメーションとなるものである。よくある朽ちた古代のイメージは避け、華麗な装飾古墳や、広瀬研究室時代のゼミ旅行で見た五色塚古墳などを思い起こし、緑の中に輝くガラスのドームでその存在を表すことにした。ドームにガラスのキューブを加え、前方後円墳と綾をつけるとともに、公園内で出土した銅鏡の直弧文を、反射率の異なる被膜をつけた熱線反射ガラスが映し出すことで、より象徴性を高めている。ドームが出現したとき、奈良県に「あれは何か」という問い合わせが何度かあったことを聞くにおよび、少しは目的を達成できたものと思っている。

●作品概要

主な用途：ビジターセンター、管理事務所

敷地面積：29,152 m²

建築面積：1,335 m²

延床面積：1,509 m²

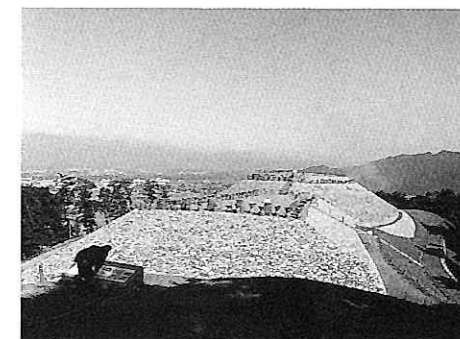
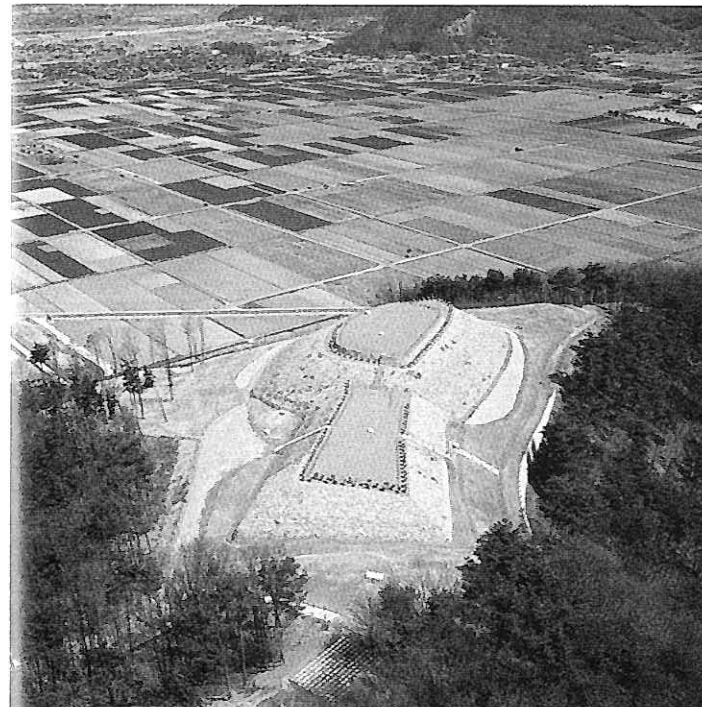
規模：地上2階

高さ：15.6 m

主な構造：RC造、S造（ドーム）

PRESERVATION & RESTORATION OF MORI-SHOGUNZUKA KOFUN TUMULUS

KOSYOKU-SHI, NAGANO
HITOSHI ARAI



森將軍塚古墳保存整備

竣工：1992年 長野県更埴市大字森

荒井 仁

文化財保存計画協会

共同設計者：丹羽謙治

森將軍塚古墳は、長野県更埴市にある4世紀後半に造られた墓である。全長約100mの前方後円墳で、丘陵の先端にあり、国の史跡に指定されている。1981年から行われた発掘調査にともない、1984年から修復工事を開始し、施設工事などとともに1992年に工事は完成した。11年間にわたる修復事業であった。

この森將軍塚古墳を築造当初の姿に復する工事は、遺構のすべて（石垣、葺石、埴輪、盛土など）を忠実に復原するものであり、日本において初めてのものである。

工学的調査、計画策定、実施設計、施工監理をすべて文化財保存計画協会で行った。古墳の解体と修復を工学技術者が計画策定から専ら関与して行った例として、貴重なデータをえたばかりでなく、今後の修復の指針となるものといえよう。

MOVING AND RESTORATION OF KUBO-IZUMI MARUYAMA REMAINS

SAGA-SHI, SAGA
HITOSHI ARAI

久保泉丸山遺跡移動整備

竣工：1983年 佐賀県佐賀市

荒井仁

1975年卒業

文化財保存計画協会

共同設計者：矢野和之、川上敏郎（文化財保存計画協会）



久保泉丸山遺跡は佐賀市の北部にあり、縄文時代晩期～弥生時代前期（紀元前2～3世紀）の100基以上の支石墓群や、5～6世紀の特色ある古墳群などからなる。これらは学術的にもきわめて価値の高いものである。しかし、九州横断自動車道建設のため、現地から約500m離れた場所に移設することになった。この計画・設計は1979、80年に、工事は1981～83年に行われた。

移設後、古墳や支石墓の壊れていた部分を復元し、遺跡景観を古代のままに再現した。また整備した古墳群に接して、遺跡や古代史を解説したウォール状やテーブル状の陶板施設、支石墓カットモデルなどを置いた見学広場を計画した。この広場は地形を生かしながらデザインしたもので、材料や配置、形態など十分に遺跡との調和がはかられている。

PHOTO: HIROAKI MISAWA

PRESERVATION & RESTORATION OF HACHIOJI-JYO CASTLE

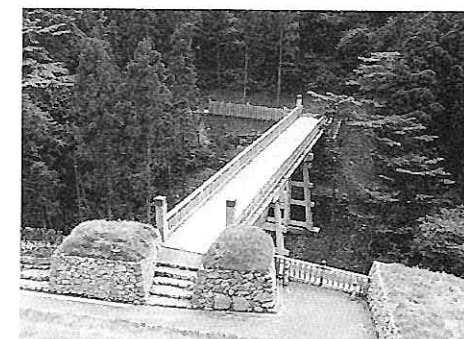
HACHIOJI-SHI, TOKYO
TOSHIAKI KAWAKAMI

八王子城跡整備

竣工：1991年（第1期工事） 東京都八王子市

川上敏郎

文化財保存計画協会



八王子城跡は、約400年前に豊臣秀吉が小田原征伐の一環として攻撃、落城させたもの。城跡は154haにもおよぶ広大なもので、城郭はすでになく、石垣、木橋などの遺構が残されているのみである。この城跡の整備は、戦国時代末期の近世城郭とは異なる「戦闘的な山城」という性格を、石垣、通路、木橋といった遺構を利用して、できるかぎり再現しようというねらいで行われた。第1期工事の設計範囲は、城跡のわずか一部の敷地を利用して、城の入口から領主が住んでいた御主殿跡までの通路整備である。谷間の斜面に設けた小さな道が曲がりくねってつづき、谷川を木橋（復原）で渡り、立派な石張階段を昇り御主殿入口にいたるといふ通路を体験することによって、山城の性格をイメージさせようという計画である。通路の途中で眼にする景観や、木橋を渡る感覚、石垣で囲まれた通路の復原などにより、籠城を意識した城づくりの往事を見学者に体感してもらおうというもの。

城石垣の保存・修理については、構造体としての工学的な解明がほとんど不可能な問題があり、その修復方法はいまだ確立されていないといえよう。しかし、崩壊しそうな城石垣は、全国いたるところにあり、それらが400年間もともかく生きながらえている理由の考察を含めた科学的な解明に取り組む必要があると考えている。

PHOTO: HIROAKI MISAWA

PRESERVATION & RESTORATION PROJECT
FOR THE HISTORIC RUINS OF KINSEI

OIZUMI-MURA, KITAKOMA-GUN, YAMANASHI
HIDESHI NAKATA

史跡金生遺跡保存整備

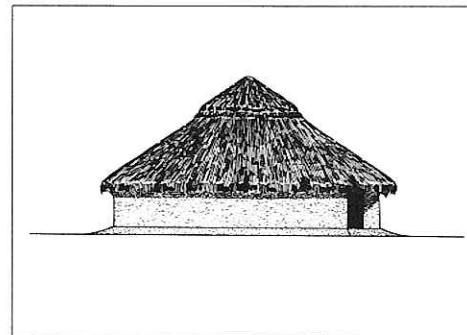
竣工：1991年 山梨県北巨摩郡大泉村

中田英史

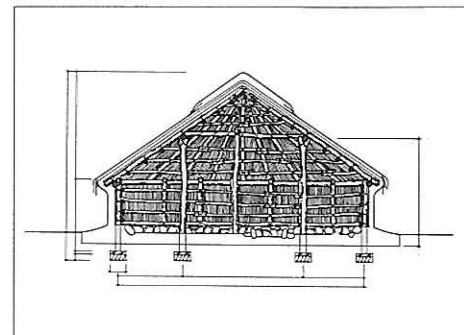
1986年卒業

文化財保存計画協会

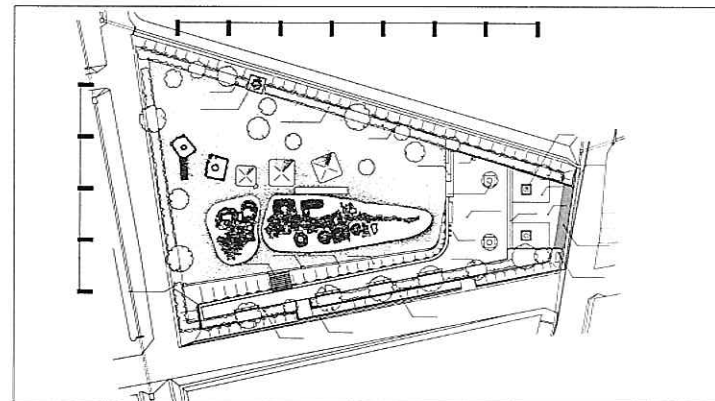
共同設計者：荒井仁（文化財保存計画協会）、丹羽謙治（デザインサークル）



復原住居平面図



復原住居断面図



遺跡保存整備平面図

史跡金生遺跡は、八ヶ岳南麓の尾根上、標高約770mに位置する。冷涼な気候条件下に営まれた縄文時代後・晩期の集落遺跡である。さまざまな時期のものが重複して発掘されたが、整備対象となったのは晩期前半の集落跡で、その遺構は配石と住居群に代表される。配石とは、膨大な自然石や男根を模した石棒などを組み合わせて構築された埋葬施設であり、また住居跡は1辺4~5mの方形石囲み型である。これらの遺構は、すべて保護盛り土によって埋め戻している。この保存整備は、大泉村と国・県の補助により実施された事業である。配石と住居3棟の復原および公開施設によって、縄文集落の整備に新たな住居構造とムラの景観の提示を実現している。配石は、これを構成するさまざまな石組みの復原と、大量の自然石が意図的に配置された特異な質感・量感の再現を目標に、採集した石の選定・設置・調整を行った。復原住居は、土葺き・壁立式とした。既往の復原例では、茅葺き屋根を地面まで葺き下ろした構造が多いが、類例遺構の調査や原始・古代の住居研究、土葺きの機能研究などに基づいて、構造形式を決定した。3棟の住居は、自然素材を用いた手作業で施工したもので、個性的な外観が金生遺跡のムラの景観を特徴づけている。

PHOTO: HIROAKI MISAWA

●作品概要

主な用途：復原した配石と住居の展示

敷地面積：3200 m²

建築面積：70 m²

延床面積：70 m²

規模：地上1階

高さ：3.2 m

主な構造：壁立式土葺き構造

3 ディテールとデザイン

建築空間は、ディテールで構成されているという見方ができる。建築家のコンセプトは、ディテールのデザインなくして実体にならない。「プランを間違えても使いにくいけど、ディテールを誤るとユーザーの死につながることもある」とは三宅敏郎先生の言葉だ。広瀬研究室でもデザインにおけるディテールの役割を重視していたことに変わりはない。ここでは、建築の実体を構成する要素としてのディテールとデザインとの関係がうかがえるものをまとめてある。（編者）

THE LITERARY MUSEUM OF KARUIZAWA

KARUIZAWA-MACHI, KITASAKU-GUN, NAGANO
NORIYUKI ASAKURA

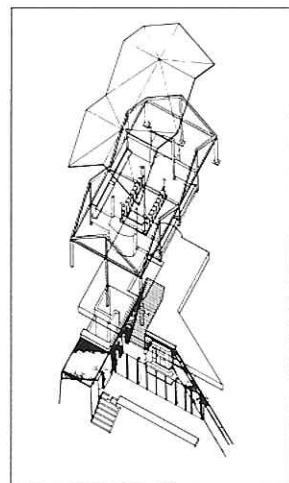
軽井沢高原文庫

竣工：1989年 長野県北佐久郡軽井沢町

朝倉則幸

1968年卒業

GK設計



軽井沢高原文庫は、軽井沢にゆかりの深い現代文学作家の研究・展覧を目的とした展示館である。

「僕は歩いていた。風の中を」(堀辰雄詩集より)堀辰雄は、自然と空間的体感の世界を見事な言葉で表現した。建築は体感の世界のメディアである。ここに集う人々は、文学のメッセージを体感し、建築の周辺を含めた環境の中でイメージする。

この建築のコンセプトは、塩沢湖畔の高原特有な風光を内包し、斜面を活用したオープンな展示空間づくりである。人工的な空調設備はなく、自然換気が風の道をつくる。内外の空間を覆う簡素なシェルターとガラスの展示装置が資料を保護する。そこでは情報(文学展示資料)と風景(風、光、霧、雪、緑、土、石)のイメージが視覚的に重なる。

従来の文学館のように閉ざされた空間に資料を展示するのではなく、資料の背景の意味をわかりやすく見せて、見る人との間にコミュニケーションを生むことが展示テーマである。もうひとつの試みは、この地域のもつ地のもとプロダクトデザイン志向の道具や建築要素の素直な共存をはかることである。具体的には、斜面外部から内部空間へ連続した浅間石の基壇とシェルターユニットのつくる空間(インターフェイス)がこの建築を特徴づける。

●作品概要

主な用途：展示施設

敷地面積：2,927.8 m²建築面積：225.3 m²延床面積：199.8 m²

規模：地上2階

高さ：12.1 m

主な構造：RC造、S造

CENTRO DE DESARROLLO INTEGRAL AGRICOLAY FORESTAL EN LA ZONA SUR DEL PARAGUAY

PARAGUAY
MICHIO KURAKAZU

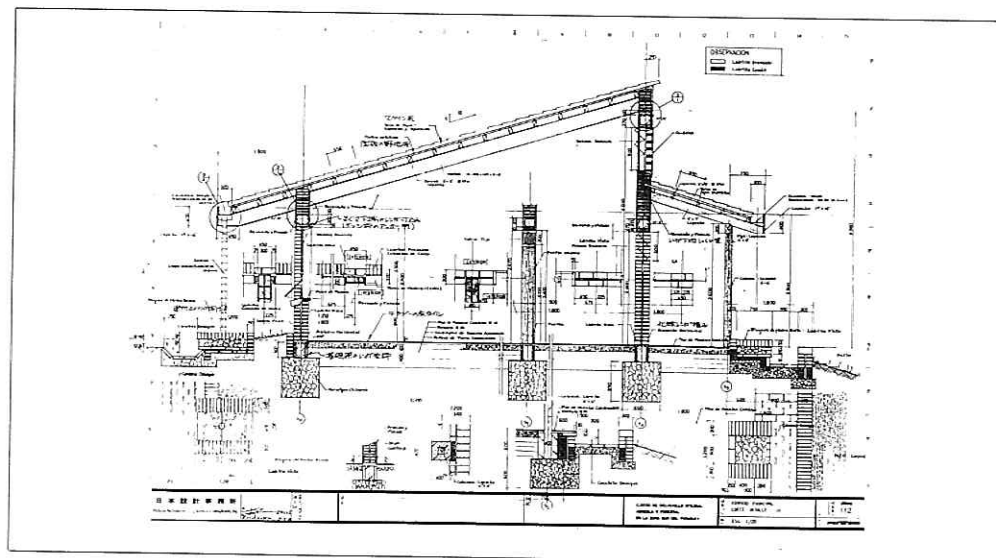
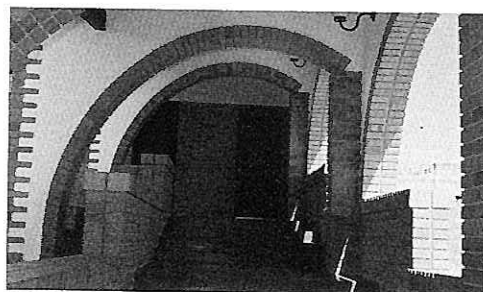
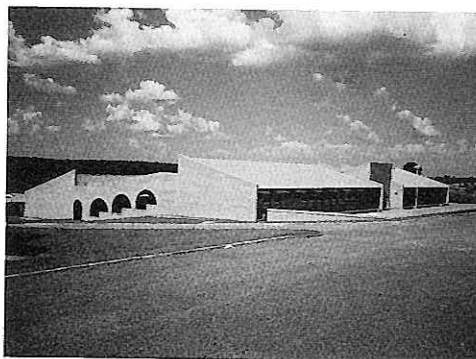
南部パラグアイ農林業総合開発センターII、農業機械化センター

竣工：1982年 パラグアイ共和国イタプア州ピラボ

倉斗道夫

1967年卒業

(株)日本設計 共同設計者：(株)日本設計



パラグアイは南アメリカ大陸のほぼ中央に位置し、農業、牧畜を主産業としている。気候は高温多湿で、夏はしばしば40℃を超える。日本からの移住者が多いことでも知られている。

この計画は日本政府の経済協力としてパラグアイ、イタプア州に建設された農業機械化センターで、同国での3つ目の工事に当たる。前2工事を通して、建築材料や工法がいかにその土地の気候風土や生活習慣に密着したものであるかを痛感した。この計画では徹底して現地材料と工法を採用し、竣工後も現地の材料と技術でメンテナンスできるように努めた。深い庇、自然換気用の高窓、建物まわりの幅広な開きよ(スコール時は瞬間降雨量100mmを超える)などは現地の気候に則したディテールであり、レンガ型枠の基礎梁、コンクリートまぐさ下端のレンガ打ち込み(サッシ枠アンカー用)などは、パラグアイ独特の工法だ。また主材料であるレンガ、陶板の化粧野地板は、押し出し成型の中空材で断熱性にすぐれ、焼き物としての風合をもつ興味深い材料である。

パラグアイは経済的には貧しいが、豊かな緑に恵まれている。点在するスペイン瓦とレンガ壁、それに緑取られた漆喰壁だけで構成された街並みは、無数の材料が混然とした東京よりはるかに美しく、改めて都市の豊かさとは何かを考えさせられる。

●作品概要

主な用途：農業開発センター

敷地面積：87,500 m²建築面積：4,000 m²延床面積：4,000 m²

規模：地上1階

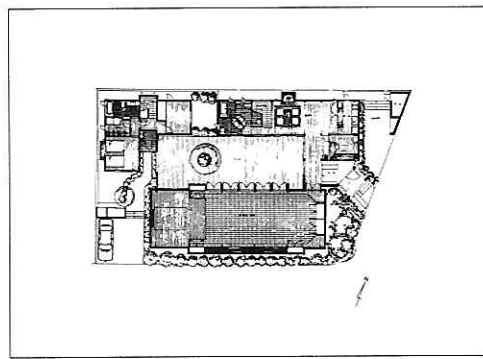
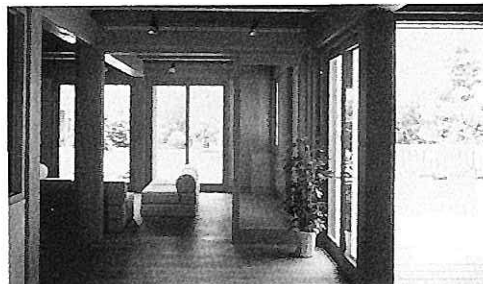
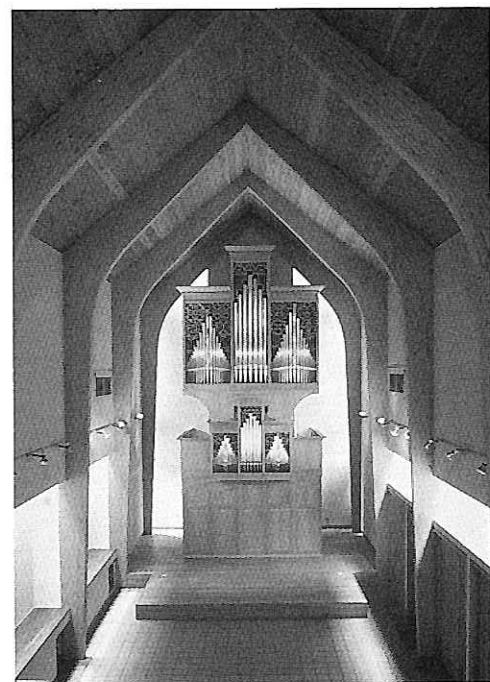
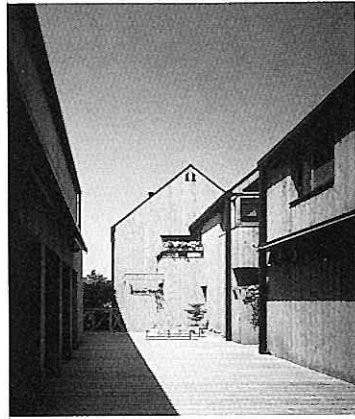
主な構造：レンガ組積造

COMMUNITY CENTER "BACH-NO-MORI"

TOKODAI, TSUKUBA-SHI, IBARAGI
SATOSHI HATTORI

バッハの森コミュニティセンター

竣工：1984年 茨城県つくば市東光台
服部哲
1974年卒業
(株)一色建築設計事務所
共同設計者：納賀雄嗣、桜田勝良 ((株)一色建築設計事務所)



1階平面図

この建物は、さまざまな音楽・文化活動を通じて、筑波研究学園都市の新旧住民の交流の場となっている。事業主体である財団は、筑波大学でオリент史を教えている石田教授が、私財を投じて設立したものである。筑波研究学園都市には夜間自由に使える施設がないこと、ヨーロッパでの生活体験から教会音楽や聖書を通じたコミュニティーに見習うべき点があることなどから、小規模の集会施設の必要性を感じ、この施設の建設を計画したのである。この街には鉄筋コンクリート造の無機質な施設があまりにも多いため、木造の施設を設計することになった。施設は次の3つの要素から構成される。

- ①奏楽堂---パイプオルガンの演奏や合唱などを行うためのスペース。湾曲集成材を用いた
 - ②管理スペース---日常活動のためのサロン、会議室など
 - ③住宅---管理のために一体的に計画された
- その後、聖書、古代エジプト史に関する研究・展示スペースが増築され、落ち着いた雰囲気をもつ一群の建物ができ上がった。

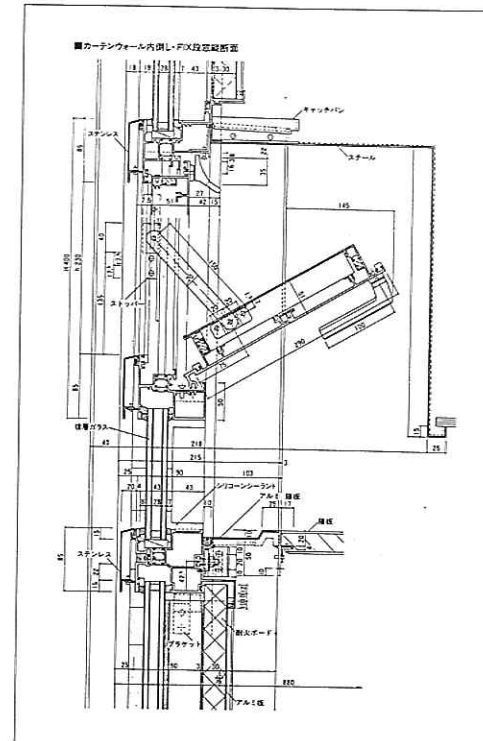
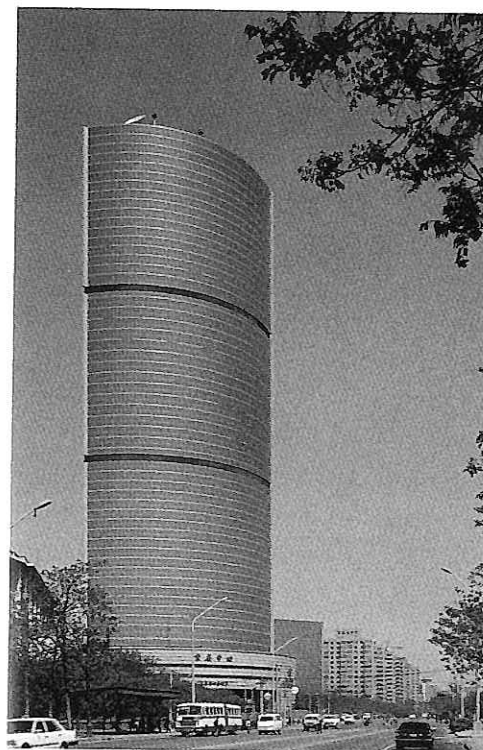
●作品概要
主な用途：集会所
敷地面積：595 m²
建築面積：290 m²
延床面積：395 m²
規模：地上2階

JING GUANG CENTRE

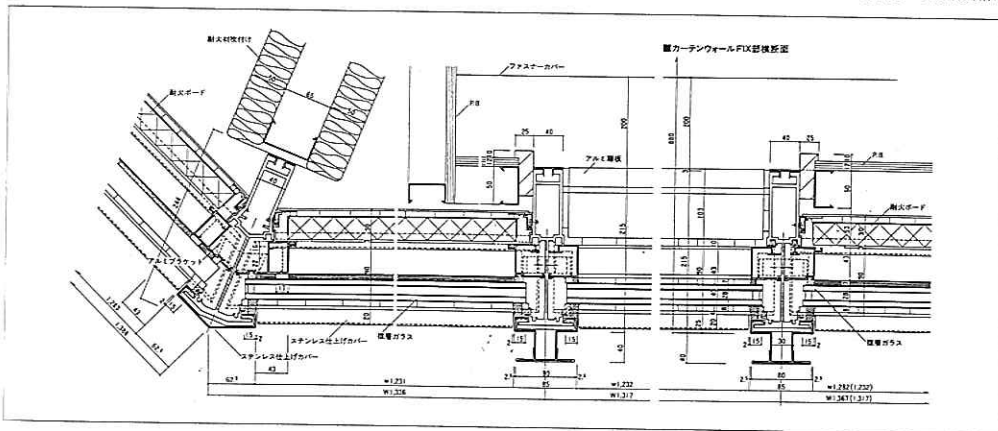
BEIJING, CHINA
SHIGERU SAKAI

京廣中心

竣工：1990年 中華人民共和国北京市
酒井茂
1971年卒業
(株)日本設計
共同設計者：(株)日本設計



カーテンウォール内倒し・FIX窓縦断面



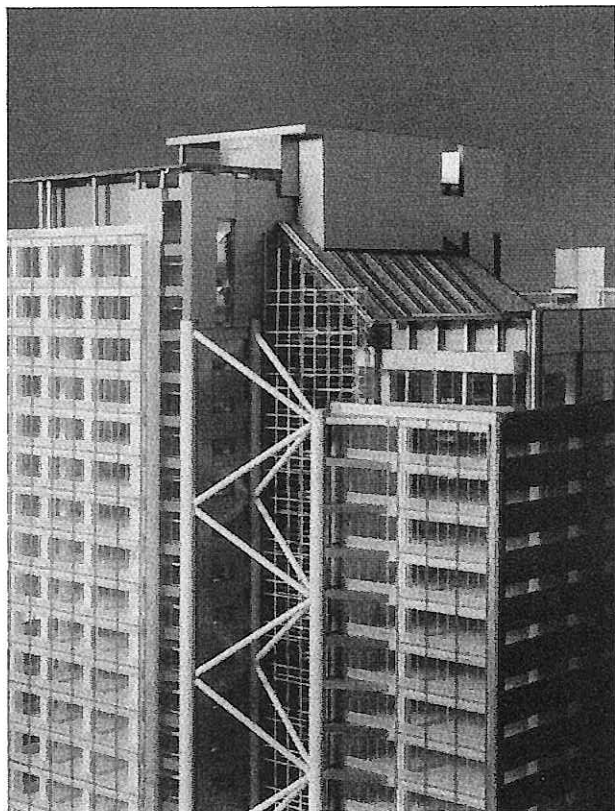
カーテンウォールFIX部横断面

中国で古来から幸福の象徴とされる扇を平面形とし、天壇のイメージを立面としたタワーデザインである。ハイテク感のある高性能熱線反射ガラスで包み、アルミのフレームはステンレスバフ磨きのキャッピングをした。北京市は大陸性気候の寒冷地であるため、スパンドレル部分も含めて全面ダブルグレーディングとし、メタル部分はヒートブリッジをつくらぬ断熱構造となっている。冬はマイナス10度以下となることも多いが、ほとんど結露はみられない。このカーテンウォールは、天井面に近い部分に高さ240mmの開閉できる窓がある。停電を起こしやすい給電事情を配慮して、煙突用の窓を兼用して設けたが、これが予想以上に利用されて好評だった。アネックスのカーテンウォールは、日本ではまだあまり例のないバックマリオン形式の2辺SSG工法で、しかもダブルグレーディングである。開閉窓は、FIX部分とまったく同じ意匠で、必要箇所に設けられた。可視光線の透過率が14%と低い反射ガラスで覆われているため、内部の複雑な用途の違いを表面に出さず、均質で精巧な壁面に仕上がった。

●作品概要
主な用途：オフィス、ホテル、住宅
敷地面積：10,343 m²
建築面積：4,667 m²
延床面積：145,047 m²
規模：地上51階、地下3階
高さ：203 m
主な構造：S造、SRC造、RC造

NAKANO SAKAUE PROJECT

NAKANOSAKAUEHON-CHO, NAKANO-KU, TOKYO
KATSUHIKO NISHIDA



中野坂上本町二丁目地区第一種市街地再開発事業

竣工：1996年予定 東京都中野区中野坂上本町2丁目

西田勝彦

1970年卒業

(株)ヘルム建築・都市・コンサルタント

共同設計者：山本・堀アーキテクト、飯田善彦建築工房

中野坂上再開発プロジェクトは、中野坂上交差点を囲むように3地区で進行中である。私たちが担当している本町2丁目地区は、地下鉄丸の内線に直接連絡しており、また本町1丁目地区とも将来は地下道で結ばれ、重層的にアプローチできるようになる。建物は高さ135mの超高層オフィスビル1棟、付属するアネックス棟、駐車場で構成され、別に高さ80mのオフィスビル棟と地権者用の住宅棟ができる。これら4棟が、1辺が120mのほぼ正方形の敷地に、2つの広場を囲むように配置されている。特に交差点に面した広場はビジネスプラザと呼ばれ、地下鉄からの出入り口も兼ねてサンクン広場になっている。この広場に接して、吹き抜けの高さが130mという、おそらく日本一の規模のアトリウムがある。これは、再開発によって生じた経済的規模の異なる地権者相互の主張を守り、かつ共用して補えるものを提供する役目を担っている。地下1階から地上2階までは商空間およびエントランスホールなどの共用部、3階以上はすべてオフィスである。アトリウムをはさんで、面積、階数の異なる2つのオフィスビルが建つ。これを4層を単位とする大きなトラス（ラチス）で結び、連結超高層ビルを成立させる。

●作品概要

主な用途：賃貸オフィス、店舗、住宅

敷地面積：13,372 m²

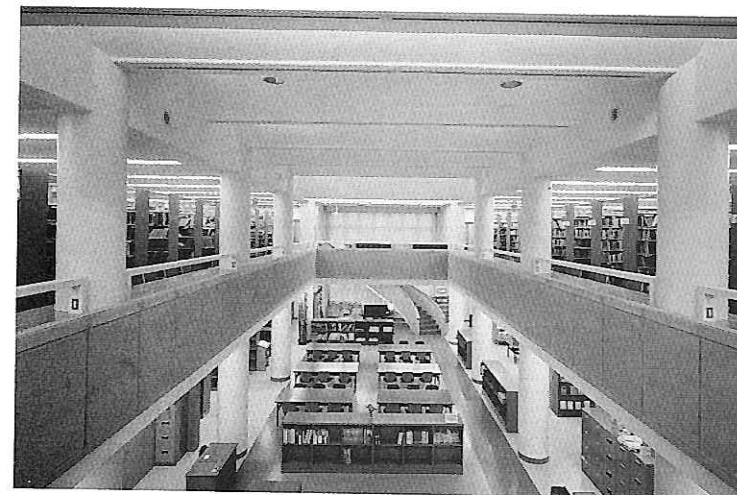
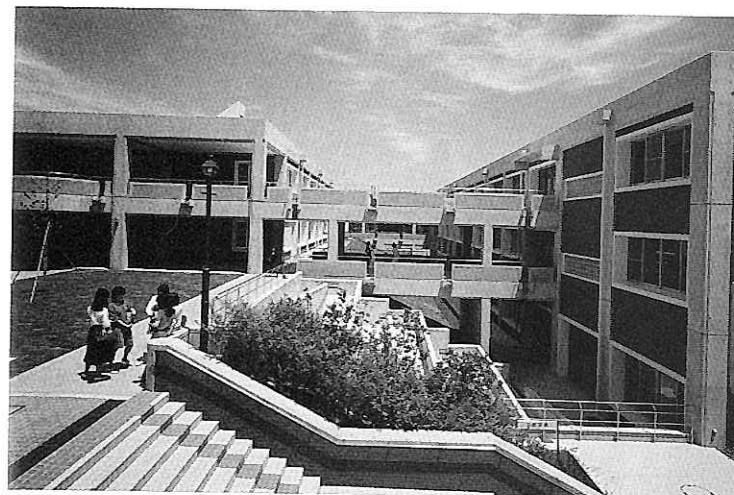
建築面積：5,500 m²

延床面積：95,234 m²

規模：地上30階、地下2階

TOYO EIWA WOMENS' JUNIOR COLLEGE

YOKOHAMA-SHI, KANAGAWA
HITOSHI ARAI



東洋英和女学院短大校舎(創立100周年記念事業)

竣工：1986年 神奈川県横浜市緑区

新居仁

1973年卒業

三菱地所(株)

共同設計者：三菱地所(株)

基本コンセプトは、キリスト教義に基づく教育の場として清楚で規律をもち、自然と馴染んだ明るいキャンパスづくりである。コンクリート打ち放しの枠取りの中に、レンガタイルと4方枠取りの窓をはめ込む構成とし、性格の異なる各棟の統一感をだした。柱梁のラーメン構造の大枠取りの出隅、入隅に小段を設け、さらに一段落としてレンガタイルを役ものを使わず平貼りとした。窓のおさまりは、PC枠に見せかけたコンクリート打ち放しの4方枠をまわし、彫りの深いものとした。窓まわりは、オリジナルディテールとして、腰の部分に放熱器をおさめ、軒天部分で室内の換気をとれるようにした。連絡通路の腰壁の内外や、図書館のインテリアで用いた研り仕上げは、打ち放しの枠取りの目地部から20mmほど離し、平整で定規彫りをし、その内側を手研り仕上げとした。図書館の半円形階段の内外にも同様の仕上げをしたが、型枠を起すまでに3か月を要した。図書館は、長形プランの中央に長形の吹き抜けを設けて外光を入れ、小さいが開放的な光の枠取りの構成とした。コンクリート打ち放しのヴォールト屋根を梁型と合わせた曲面で受け、両サイドを天窓とした。吹き抜けに面した読書机の上のコの字の照明は一般溝型銅に蛍光灯を入れ、仕上げた。

●作品概要

主な用途：学校

敷地面積：164,686.5 m²

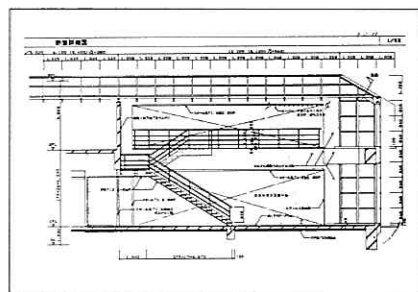
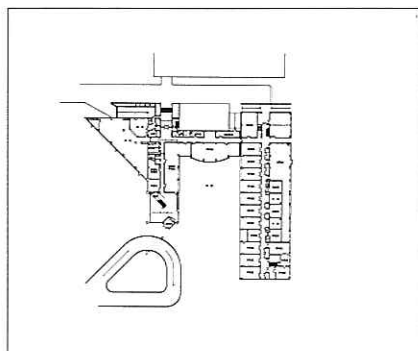
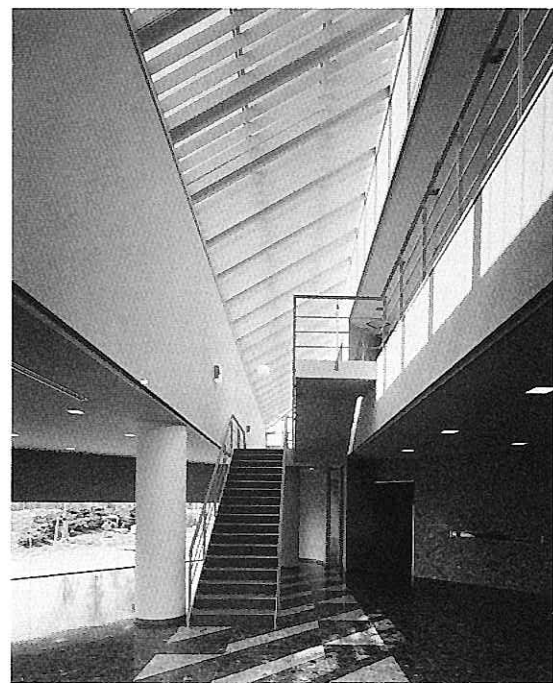
建築面積：6,194.3 m²

延床面積：12,231.7 m²

規模：地上2階(図書館)、地下1階

主な構造：RC造、SRC造、S造

CORNING JAPAN, SHIZUOKA FACILITY

OGASA-GUN, SHIZUOKA
SUSUMU HAYAKAWA

コーニングジャパン静岡

竣工：1989年 静岡県小笠郡大須賀町

早川進

1968年卒業

(株) 山下設計

共同設計者：安田俊也

この施設は、特殊ガラスでは世界的企業であるアメリカのコーニング社のリサーチテクニカルセンター（R&T）と、特殊ガラスの加工工場の一期工事である。図のプランは、事務部門とR&Tの部分で、施設の顔として形と機能の調和がはかられ、また研究者のための自然豊かな環境がテーマとなっている。このディテールは、三角形の躯体キャノピーおよび玄関ホールと他の空間への接点である階段部分である。トップライトと両サイドのガラスカーテンウォールを連続させることにより、来訪者が降時立ち止まる空間を意図した。また平面形状はひし形で、その施工精度に気を使った。

●作品概要

主な用途：研究所、工場

敷地面積：80,432㎡

建築面積：8,497㎡

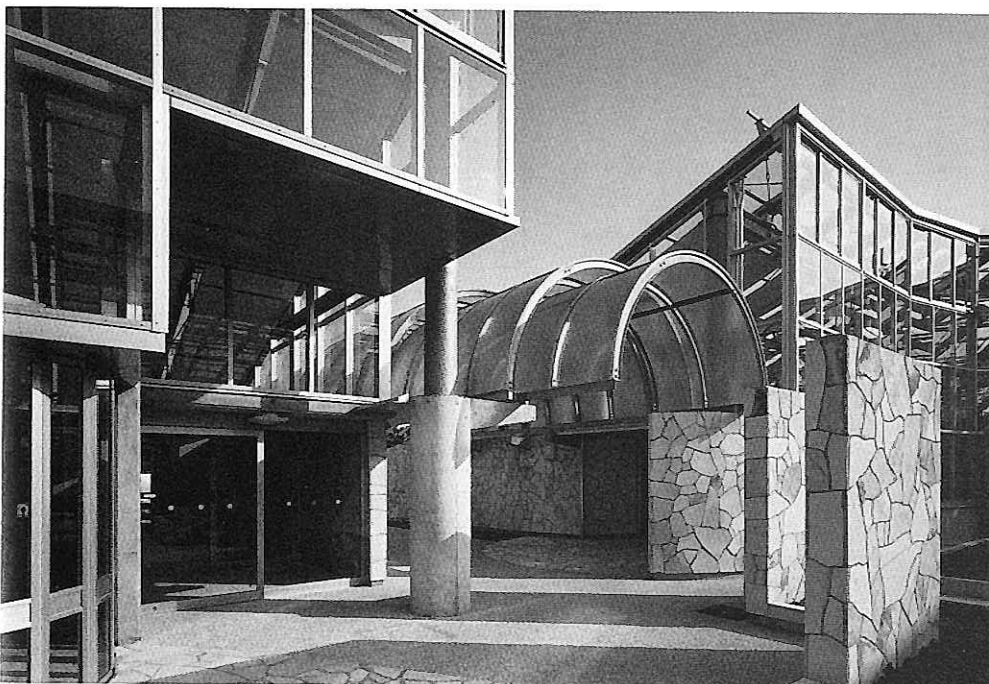
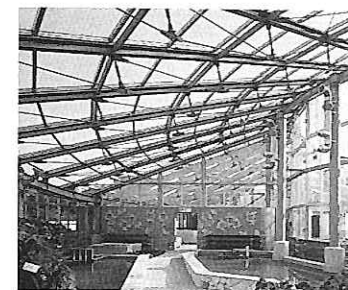
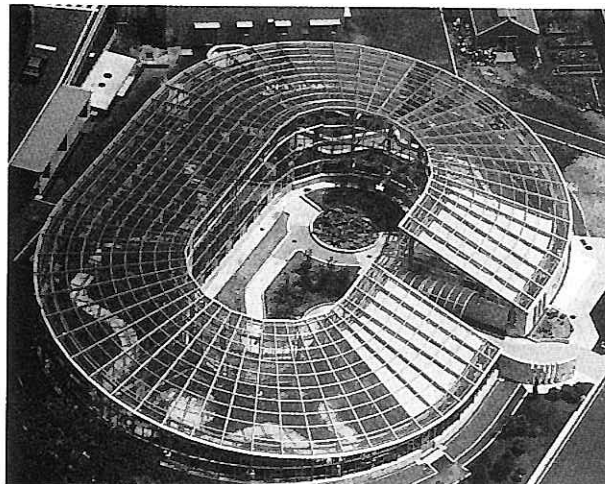
延床面積：10,592㎡

規模：地上2階

高さ：10.1m

主な構造：RC造、S造（工場）

A GREEN HOUSE OF OFUNA BOTANICAL GARDEN

KAMAKURA-SHI, KANAGAWA
TSUNEO KANEKO

神奈川県立フラワーセンター大船植物園鑑賞温室

竣工：1992年 神奈川県鎌倉市

金子恒雄

1967年卒業

(株) ユー・アール・ユ-総合研究所

共同設計者：アトリエ蒼樹（造園）、志田システム設計事務所（温室自動制御）

開園30周年を記念して計画されたこの温室は熱帯、亜熱帯の美しい花を中心に約1200種の植物を展示している。敷地が狭く、また隣接した住宅地への配慮から、長円形のドーナツ形になった。厳しい予算内で構成部材の単純化や同一化をはかるため、入り口を低く、反対側を徐々に高くする形状にした。これによって入園者の期待の拡大と、背後の緑と空に緩やかなスカイラインを加えることをねらった。内部は、洋ラン、ハイビスカス、南米花木、つる性植物、スイレン、花鉢の6室に分け、それぞれ最適な環境が維持できるよう、室別自動制御方式を取り入れた。また中庭は、温室からの放射熱を利用した無霜庭園とし、オーストラリアやニュージーランドの珍しい植物を展示している。

温室建築は何にもまして多くの光をとり入れることが使命である。そのために、掘立柱と張弦梁をピン構造で鉛直荷重のみを負担させるようにして、構造部を最小限にとどめた。温室といえば、ロンドンのキューガーデンに再建されたバックストンのクリスタルパレスがすぐ思い浮かぶ。あの優美な姿にはとうてい及ばないが、自然光をより多くとり入れたという点では他園との差ができたと自負している。

●作品概要

主な用途：観賞温室

敷地面積：63,893㎡（フラワーセンター）

建築面積：1,471.2㎡

延床面積：1,471.2㎡

規模：地上1階

高さ：8.5m

主な構造：S造

HIYORIYAMA SEA ZOO

HYOGO
YOICHI TAOKA

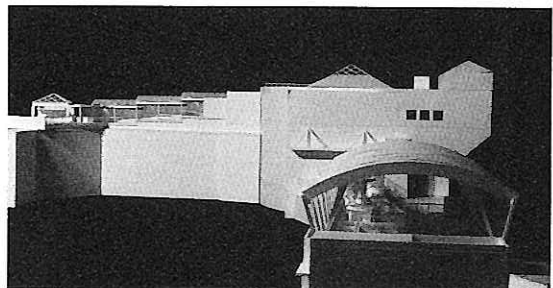
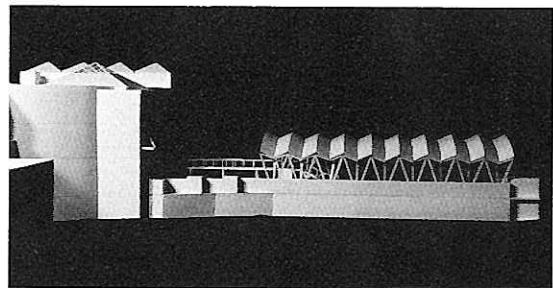
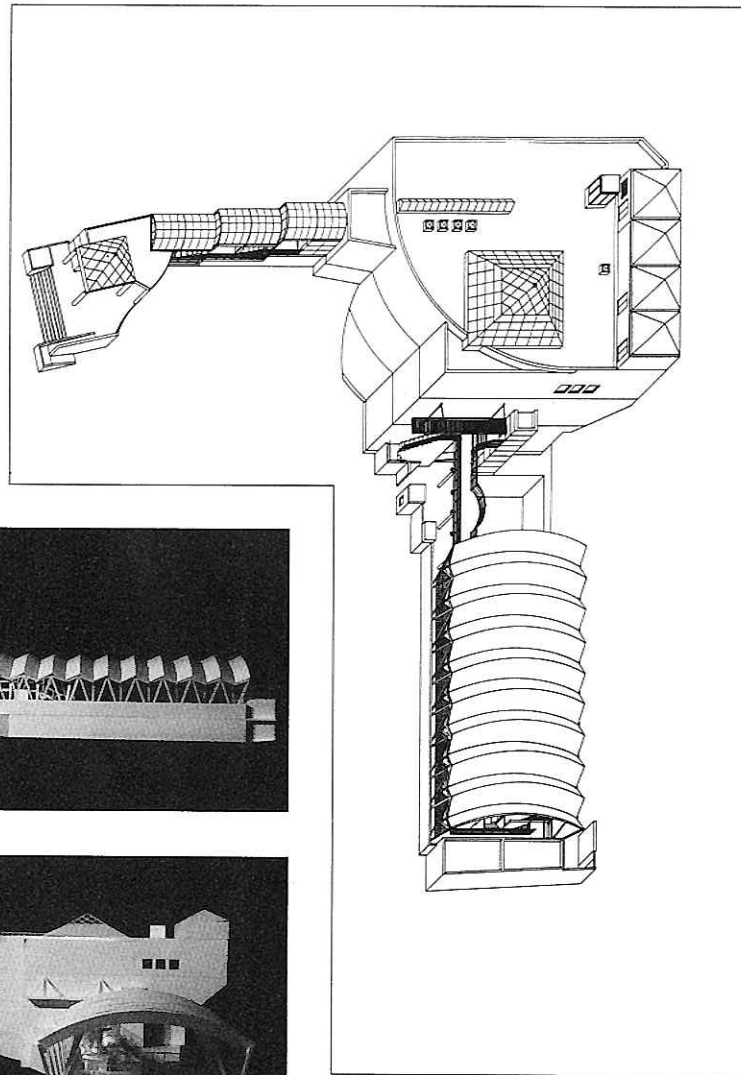
日和山水族館・Sea Zoo

竣工：1993年予定 兵庫県

田岡陽一

1971年卒業

田岡陽一建築工房



日本海に面して建つ水族館である。自然の岩が海にせり出し、入江となった海にじかに接している。建物はゲート・アプローチ、本館、自然水槽の3つに大きく分けられ、高低差のある敷地条件から3階建ての最上階から入館する計画である。本館は斜面に食い込んだ形態をとり、周囲の植栽が屋上につながるようにした。本館のメイン水槽は3層分の深さがあり、トップライトをもつ吹き抜けに面しているため、その深さをより認識しやすい。吹き抜けに設けられた階段を降りると、各層にわたり個水槽が配置されて、光をコントロールした幻想的な展示スペースとなっている。自然水槽と呼ばれる部分は、自然の岩を極力生かした屋外展示スペースである。この屋根部分には光を透過するテフロン膜を用い、意匠的には波のフォルムを重ねている。非日常性の高い展示スペースを内包し、外部に対しては自然と対峙しながら調和する水族館を目指している。

●作品概要

主な用途：水族館

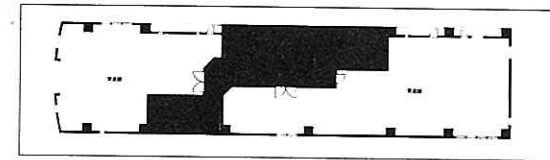
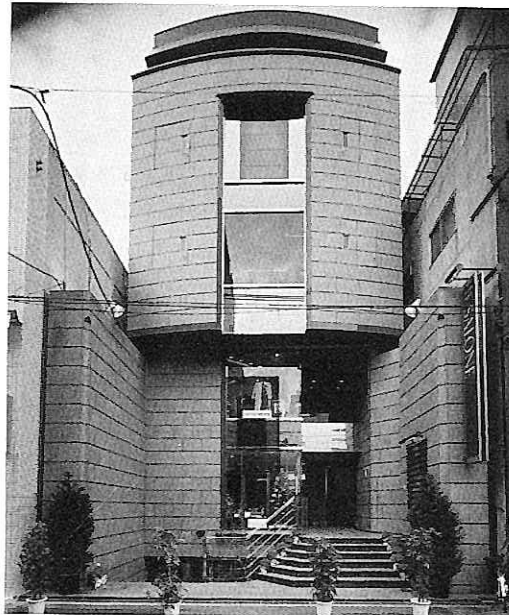
建築面積：1,920㎡

延床面積：2,650㎡

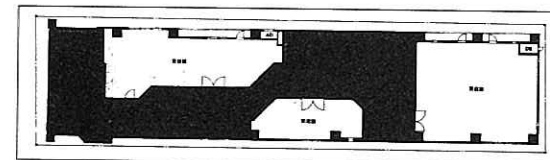
規模：地上3階

主な構造：RC造、S造

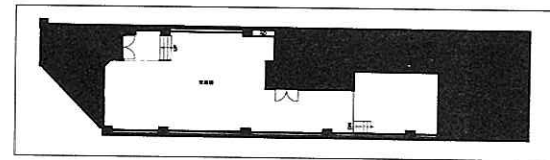
GRAND PLACE SALONE

MINAMI-KU, OSAKA
MICHITO NODA

4階平面図



1階平面図



地下1階平面図

敷地は、大阪ミナミ地区の特徴ともいえる狭い幅員の前面道路に面した、奥行きに極端に細長い地形である。このため外観のデザイン表現は、前面道路側面のみでしかできない。建物の構成は、1階をGLより約1m上げて、地階部分がドライエリアごしに前面から見えるようにした。1、2階は前面に広がりをとるため、約5mセットバックし、3、4階は1、2階より2mもち出して道路斜線制限内ぎりぎりまで納めている。外壁は赤黒色系の花崗岩をJP仕上げの馬貼りとし、アクセントに横目地を3cmの幅広の本磨き仕上げとした。変化と柔らかさを出すために、3、4階は外壁面を半径30mの局面の石加工とし、非常用進入口および2方向非難のための非常時脱出口も石貼りの曲面扉として組み込みデザイン化している。5階のセットバックによるルーフバルコニーの立ち上がりの笠木は、半丸形に花崗岩を曲面加工し、5、6階のセットバックによる庇部分はアルミの自然発色材を道路斜線制限の勾配ラインぎりぎりにもち出して曲面形に加工して取りつけている。

●作品概要

主な用途：商業ビル

敷地面積：411㎡

建築面積：295㎡

延床面積：1,890㎡

規模：地上6階、地下1階

"CHIFLEYS" RESTAURANT

CHIFLY SQUARE, SYDNEY, AUSTRALIA
NOBUKAZU MATSUDOU



竣工：1993年予定 オーストラリア、シドニー
松藤展和
1984年卒業
トラビス・パートナーズ
共同設計者：アリソン・ハリマン

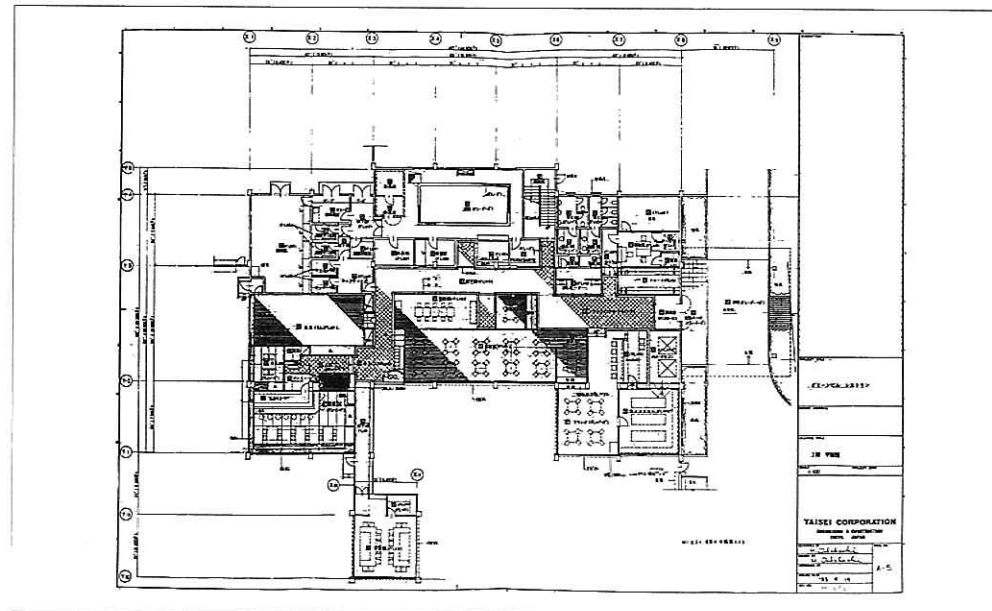
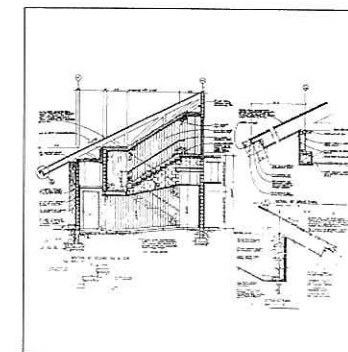
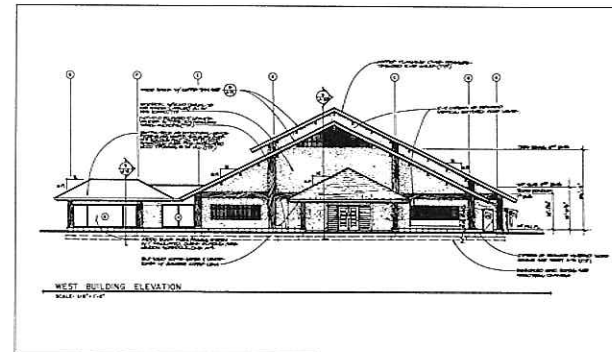
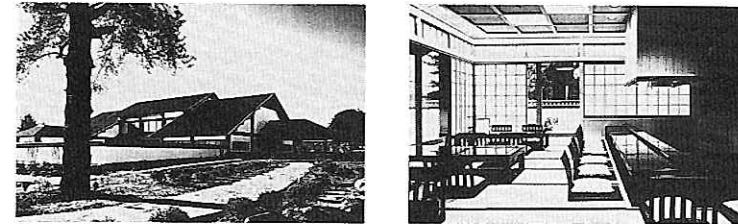
チフリータワーは、1992年6月に竣工したオーストラリア初のインテリジェントビルだ。その41階と42階に、レストラン「チフリーズ」が93年1月にオープンする。ビルはニューヨークのK P F社と私が勤務するトラビス・パートナーズ社との共同設計である。当初、最上階はオフィススペースとしてデザインされていたが、クライアントの意向によりレストランに変更され、91年12月、指名コンペにより当社の案が選ばれた。レストランは、このビルに入居する東京海上火災、全日空をはじめ、オーストラリアの一流弁護士事務所、会計事務所などテナントのためのメンバーズレストランとして利用される。デザインは、ビル全体の威厳に満ちた冷たい雰囲気とは対照的に、暖かみのあるくつろげる空間を目指した。素材も床のパークетや壁には木材、手すりは真鍮、カウンタートップはみかげ石というように、なるべく天然材を使っている。41階のレセプション・ラウンジエリアから42階のダイニング・ファンクションエリアへ、客の動線を視覚的に誘導するため、42階の床スラブをぶち抜いて階段をつくった。この階段のデザインのような、曲線のあるディテールがレストラン全体で採用され、統一されたイメージを生み出している。現在はオープンに向けて、工事も最終段階に入ってきた。(1992年10月6日)

●作品概要

主な用途：レストラン
延床面積：900㎡
高さ：2.7~3.2m

A NEW JAPANESE RESTAURANT,

GREENVILLE, SOUTH CAROLINA, U.S.A.
HIROSHI TAKAHASHI



レストラン「八事」

アメリカ、サウスカロライナ州グリーンビル市

高橋 浩 1969年卒業

大成建設(株)

共同設計者：西田幸男(インテリア 大成建設(株))

W.バリー・アグニュー・アーキテクト(実施設計)

●日米の協同設計・施工

この地に紡績会社を所有する発注者が、日本文化の紹介を兼ねた日本食のレストランをつくりたいというのが、プロジェクトのねらいであった。私の役割は、事業意図を具体化し、敷地選定で助言し、オーナーの意図に沿った和風の建物をいかにして米国の片田舎の町に実現するかということであった。本格的な和風建築を米国に持ち込むには、技術的、政治的問題が予想されたため、次のように進められた。

- 1 基本設計・内装設計は日本側で行う
- 2 実施設計は米国の設計事務所が担当する
- 3 実施設計の指導は日本側で行う
- 4 和風の内装以外は現地仕様とする

●情報の入手と計画・ディテールへの反映

大成建設の子会社が現地に進出しており、ブロック、レンガ、ツーバイフォー等の施工技術や気候等に関する的確な情報を入手して、設計に反映することが出来た。計画的には、習慣や法規の違いを理解することから始まった。日本人がほとんど居ない地方なので、日本の習慣はまったく通用しない。施工についても、建設コストに係わるため、現地の在来工法で建物の骨格と外装をつくり、和風の造作は日本で刻み、日本人の大工によって仕上げさせた。この建物は日米の伝統と技術を駆使することにより、ようやく完成された。

●作品概要

主な用途：日本食レストラン
敷地面積：21,044㎡
建築面積：1,164㎡
延床面積：1,471㎡
規模：地上2階
高さ：12.5m
主な構造：S造

CLARENDON PRIMARY SCHOOL

PORTLAND, OREGON, USA
SHINGO MITO

クラレンドン・プライマリースクール

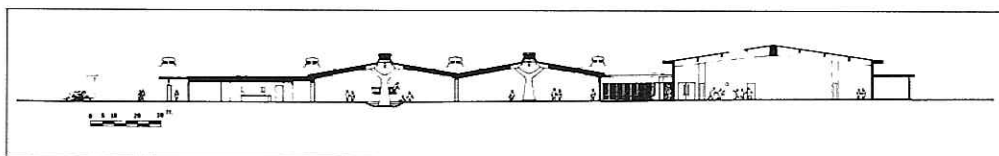
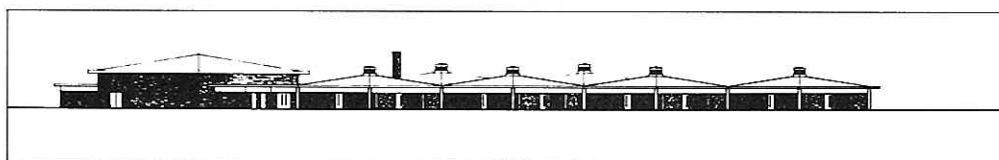
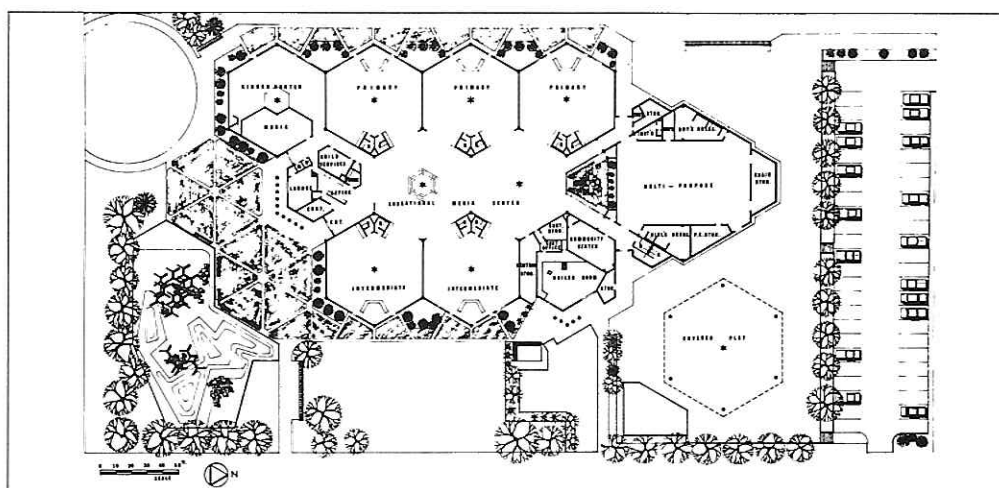
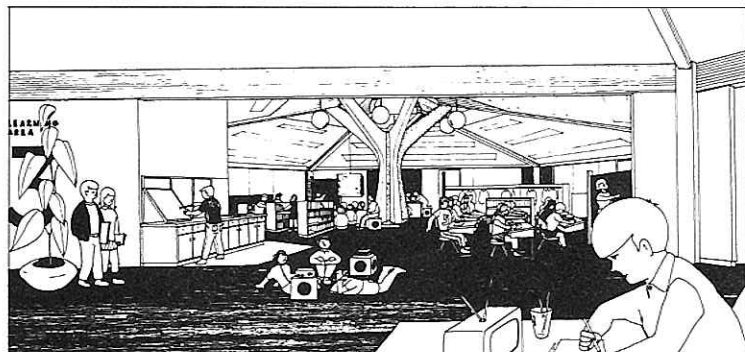
竣工：1973年 アメリカ合衆国オレゴン州ポートランド市

三登真吾

1968年卒業

三登AIA建築設計事務所

共同設計者：A、B、D&H AIA



渡米してから4年目、A、B、D&H AIA事務所に移籍して初めて手がけた建物である。従来のプライマリースクールによくみられたクローズドプランを、思い切ったオープンプランニングの手法に変えてみた。学校の平面計画を大きく変えるためには、当然カリキュラムも新しく提案しなければならなかった。特別な部屋は別として、すべて多目的空間とし、スペースのコンビネーションが自在の六角形を平面ユニットとした。ルーフストラクチャーはすべて米松の集成材である。

●作品概要

主な用途：プライマリースクール

敷地面積：95,000㎡

建築面積：3,900㎡

延床面積：3,500㎡

規模：地上1階

高さ：9m（最高軒高）

主な構造：RC造、W造

A CABLE TV STATION IN CHOFU

SOMECHI, CHOFU-SHI, TOKYO
NAOKI NUMATA

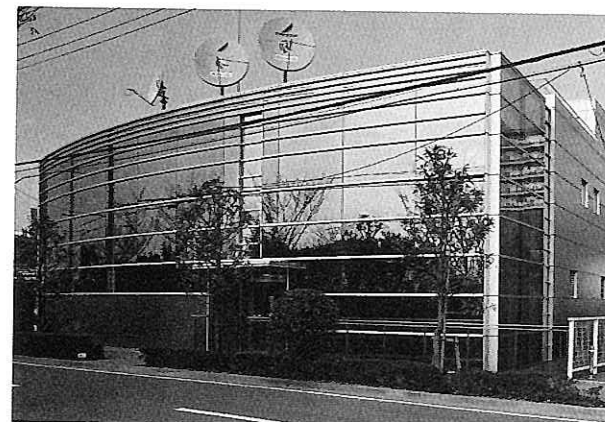
調布CATV局

竣工：1991年 東京都調布市染地

沼田直樹

1977年卒業

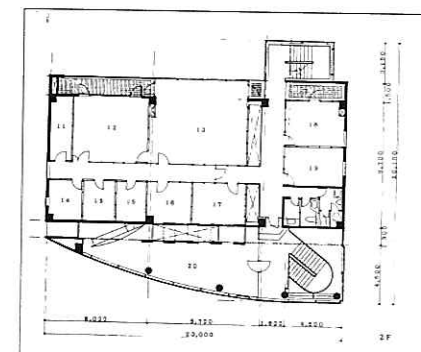
アルクデザイン一級建築士事務所



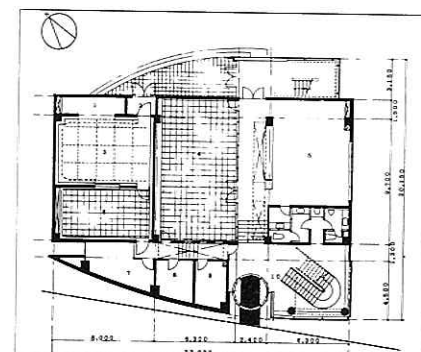
調布市内の家庭に、BS、CS、地上波を有線で送り出す施設である。また自主放送を制作するために独自のスタジオ・副調整室が完備され、見学者へのホスピタリティも十分に配慮されている。ディテールは次のようなコンセプトに基づいて検討された。

- ①高度なテクノロジー
- ②光の演出と静かで落ち着いた表情の空間
- ③規格部品の組み合わせによる美学の追求

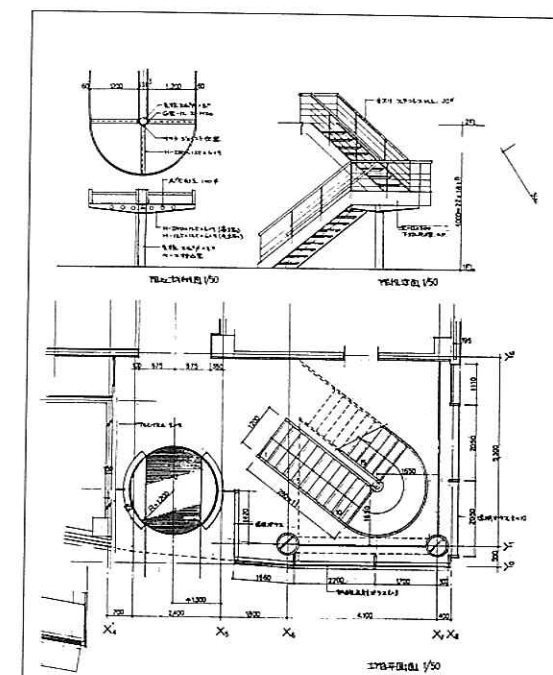
素材と部品は、工期が9か月であることとコストの点で、使用可能なものをいくつか決め、その組み合わせでさまざまな表情を出すことにした。多摩川の美しい緑を映し出す正面の曲面カーテンウォールは、半円型断面のキャップをつけてアクセントとした。階段室の透明感のあるカーテンウォールには、L型チャンネルを組み合わせたシャープなサッシを使用した。アルミパネルはオープンジョイントを採用し、開口部もフラットバーの組み合わせでシャープな表情を出している。



2階平面図



1階平面図



階段詳細図

●作品概要

主な用途：放送局

敷地面積：749㎡

建築面積：392㎡

延床面積：710㎡

規模：地上2階

高さ：9.99m

主な構造：RC造、S造